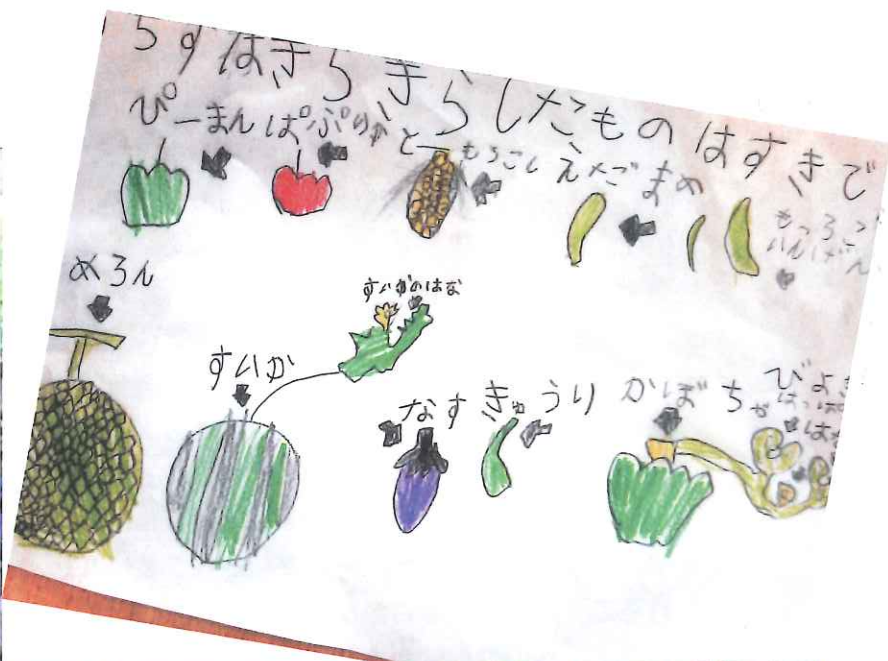


5歳児の協同体験の中で はぐくまれる創造性



社会福祉法人 湘北福社会 あゆのこ保育園副園長
福田奈美恵

1. あゆのこ保育園の概要

あゆのこ保育園は、神奈川県厚木市にある私立の認可保育所として、平成17年4月に開園した。定員は120名で、現在134名が在園している。0歳児～5歳児まで1クラスずつあり、開所時間は7時～20時（土曜日は～18時）である。様々な地区から入所してきており、卒園後は毎年10校前後の小学校に分かれて就学する。



保育理念は「児童の最善の利益の保障」「保護者に信頼される温かな支援」「地域の子育て支援の充実」「理論と実践の相互啓発による先進的保育」の4つである。その中でも「児童の最善の利益の保障」が、当園の保育のベースとして大切にされている。保育所保育指針を基に、一人一人の子どもの人権を尊重し、いかなる差別もなく愛され、あるがままの自分であることを認められ、幸せに過ごせるよう配慮している。そのことにより、子ども達が自分自身を自由に表現し、一日を振り返って「楽しかった」と思えることを目指している。

また、戸外活動を中心とした感動と手ごたえのある保育を大切にしている。季節の変化や虫、植物、天候などに関心を持ち、自然環境の変化への関心を育み、豊かな感性が育つよう保育に取り組み、感動したこと、不思議に感じたこと、創造したことなどを保育士や友達に伝えたり、自分で試行錯誤する中で挑戦したりしながら、様々な表現して楽しめる子どもを目指している。



園をとりまく環境として、当園は厚木市の中でも人口の一番多い地区に属している。幹線道路（国道246号線）が近くを通っており、園の東側に位置する本厚木駅までは大人の足で13分と比較的近く、市街地としての印象が強い。子ども達は、小さな頃から電車や車を見に行ったり、5歳になると徒歩で駅前を通過して、科学館にプラネタリウム鑑賞に出かけたりもする。

反面、園の西側には田畑や川などが広がり、天気の良い日には大山や富士山が望めるなど、豊かな自然にも恵まれている。車の行き来のない安全な農道は草花や虫探しの絶好の場となり、近くの恩曾川ではコイやアヒル、カモなどにも出会うことができる。近隣の湘北短期大学とは連携しており、大学敷地内の裏山に出かける機会がある。裏山は散歩道が整備された森林になっており、年間を通して訪れることにより自然の変化を感じることができる。また徒歩20分程の場所には、市の緊急避難場所にも指定されている「ほうさいの丘公園」があるなど、4歳児や5歳児は、散歩や遠足で季節の自然に十分に触れながら遊ぶことができる。



2. 活動事例「スイカ栽培を通して」

本研究会のテーマ「これからの時代に求められる資質・能力を育成するための幼児教育指導」のキーワードとして“創造性”が挙げられた。今回は5歳児の子ども達が、栽培活動を行う中で課題にぶつかり、それをきっかけに地域や家庭とつながりを持ち、様々な知識や経験を活かし協同しながら解決に取り組んだ事例を通して、特に5歳児の集団の中に創造性が芽生える様子に焦点を当てて紹介したい。尚、対象となる5歳児クラスは23名である。

当園の「育てたい子どもの姿」に「食への正しい理解ができ、食事を楽しむことのできる子ども」がある。“野菜を育てることで食への興味関心を深める”というねらいから、3歳以上児が栽培活動を行っている。当園の園庭奥にある菜園スペースでは、春はジャガイモ、夏はミニトマトやナス・ピーマン・キュウリ・インゲン、秋にはキウイ・サツマイモなどを育てている。収穫した食材を使って園内で調理を楽しんだり、家庭に持ち帰っていただいたりしている。最近では、どのようにして食べたかを写真入りでご報告くださる保護者も増えてきた。春には菜園入口のアーチでブラックベリーを育て、子ども達が実を摘んで、ジャムやジュースを作るなどして楽しんでいる。



園の隣にある農家さんから「ラッカセイがハクビシンに食べられて全滅した」という情報を伺うなど、地域柄、カラスなどの野鳥やモグラ・ネズミなどの小動物、虫による食害も多い。菜園でも以前から食害はあり、野菜がうまく育たないこともあった。子ども達はがっかりするものの、それ以上には発展しなかった。「育てやすい夏野菜」ということでミニトマト・ピーマン・ナスなどを選んでいるが、たくさん収穫できるので、いくつかが食害にあってもさほど気にはならなかったのかもしれない。



今年は、担任が「作りたい・食べてみたい夏野菜を子ども達に聞いてみよう」と、子ども達に投げかけてみた。子どもからは「スイカを作りたい!」「パプリカ!」「とうもろこし」「カボチャ」など、今まで育てたことのない野菜の名前も挙がった。

今回ご紹介する事例は、当園“初”の試みの一つとなった“スイカ栽培”の様子である。“限られた数しか収穫できない”スイカの栽培を通して、子ども達はあらためて“食害”を意識することになった。皆で食害を防ぐための知識を集め、意見を交わし合い、アイデアを形にしていった過程を追ってみた。

1) 苗から育てよう!

①自分達で買いに

5月15日、園から徒歩で15分程度の地域のJA直売所に5歳児クラスが、自分たちが育てるスイカの苗を買いに行った。スイカの苗の他に、一緒に挑戦することになったカボチャやとうもろこしの苗、そして4歳児クラスと3歳児クラスから依頼されたきゅうりなどの苗もまとめて買って来た。

今までは、育てる野菜の苗を担当が手配し、子ども達は植えつけのところから係わったが、今回は自分たちで苗を買いに行くところから係わることにした。

この直売所には毎年5歳児クラスが買い物体験でお世話になっている。予め園から活動のねらいや内容などを文書でお伝えし、子ども達の



地域交流や社会体験のためのご協力をお願いしている。お店の方々は、子ども達だけで買い物する様子を、優しく、さりげなく見守ってくださっている。

このように、自分達で育てたい野菜を選び、その苗を自分達で買いに行き、たくさんある中から選んで買ってくるという経験は、その後も栽培活動に対してより深い興味関心を持って係わる姿につながる事となる。

②いよいよ植え付け

5月17日、購入した苗を菜園に植え付けた。3歳児クラスの時から野菜の栽培に親しんでいる子ども達なので、植え付けは手慣れたものだ。植え付け用の穴を掘る、苗を指で挟んでポットをそっとひっくり返し引き抜く、植え付けた後は土をトントンと優しく均す、水をたっぷりとあげる等、皆で手分けをしながら進められた。スイカの苗も2本植えた。

苗を植えた場所には、カラーペンで『かりんぐみ』と書かれた看板も自分達で立てた。年下のクラスの子も足が踏み入れたり、勝手に収穫してしまうことなどを防ぎたいという思いからのようだ。自分たちが以前、畑の中に入ってしまう、年長の子も達から注意された経験も思い出したかもしれない。

この日は、園で用意したお弁当箱に給食を詰めて、菜園で食べた。普段保育室で食べるのとは違う戸外の気持ちよさを味わい、植えたばかりの可愛い苗を見守りながら、思い思いの場所で昼食を楽しんだ。

初めて経験するスイカの苗が無事に育つか…。担任は正直、「本当に実が^なるのかな・・・」と半信半疑だった。子どもも保育士も心配しながら見守った。そんな中、スイカの苗はつるをグングンと伸ばしながら茂っていった。子ども達からは「つるがのびてきたね」「花が咲いたよ!」「まだかなー」など、スイカの生長を楽しみにする声が聞かれた。外遊びの度に苗の様子を見に行ったり、雑草を抜いたり、水をあげたりしながら継続的に大切に育てている姿が見られた。



③ついに実が生った！

6月9日、菜園でいつものようにスイカの様子を観察していた子ども達が、小さなスイカの実を見つけた。

「ねえ！スイカができてる！」「あっ本当だ！先生、スイカができてるよ！」「ちっちゃいねー」直径3cm弱ほどの小さな実だが、模様は立派なスイカ柄。自分で育てない限り、こんなに小さくてきれいなスイカを見る機会はない。嬉しさと驚きで、子ども達は保育士を呼んだり友達を呼んだり大興奮だった。一般的なスイカの大きさもイメージできている子ども達にとっては赤ちゃんのように小さく、「まだ小さいから、あまり触り過ぎたらだめだよ」「そっとだよ」など、小さなスイカをいとおしく思い、大切にしたいという気持ちが表れていた。



2) 大事件！！せっかくの実が・・・誰の仕業？

ある日、菜園にいた子どもが4歳児クラスの育てているキュウリの異変に気付いた。「先生、キュウリが何かに食べられちゃったみたい」。良く見ると、美味しそうに育ったキュウリに大きな食べ跡がある。「いったい誰がやったんだろう・・・」近隣の農家の方を見かけた子ども達は、早速話を聞きに行った。すると、農家の方は食べ跡を見て「これはカラスだね」「おじさんの畑も、カラスにやられているよ」「ネットをかけないと、スイカも食べられちゃうかもしれないよ」など教えてくださった。また、畑を見回った子どもが“カラスの羽”が落ちているのを発見した。「やっぱり、カラスだ」と子ども達は確信し、“スイカにネットをかけよう”ということになった。



ところがそれから間もない6月19日、スイカにネットを掛ける前に“異変”が起きる。直径7cmくらいまでに育ってきた1つのきれいな丸いスイカの実にザクザクと穴が空いていたのだ。

「あっ！やられた！」「先生、スイカがカラスに食べられちゃったよ」と子ども達は驚いたり、ガッカリしたり…。「先生、カラスが入らないように早くネットを掛けよう！」大切な残りのスイカの実を守る為に子ども達から声が挙がり、とりあえずの策としてスイカにネットをかけて守った。

3) カラスの嫌いなものって何？ アイデア集まれ！

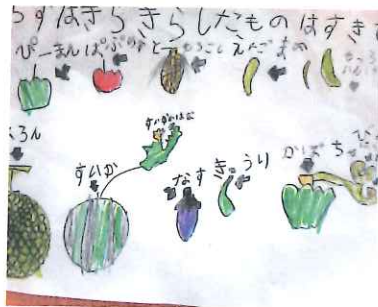
スイカにネットを掛けたものの、他の野菜もカラスに食べられてしまうのではないかと心配な子ども達。担任は早くネットを用意して野菜を守ろうと考えていたが、子ども達からカラス避けに関する話題が挙がり始めた。「田んぼや畑でキラキラしたものを吊っているのを見たことがある。あれは鳥を避けるものではないか？ カラスも光るものが嫌いなのでは？」と予測する姿もあった。担任はこれを学びの機会と捉え、“カラスから野菜を守る方法を、子ども達自身が考える機会・活動にしよう”と考えた。

これまでも、子ども達だけで解決できないことや、何かアイデアがほしい時などに、担任が「家で、おうちに人にも聞いてみてね」などと声をかけていた。翌6月20日には、保護者に聞いたり、一緒に調べたりしたことを紙に書いて持ってくる姿があったので、担任がその内容を皆の前で発表する時間を設けた。一人の男児が家庭で調べてきて、皆の前で発表した。「お父さんがこう言ってたよ。カラスは光るものが好きだって。だから、巣に光るものを持って来ることもあるんだ」。それをきっかけに子ども達からさまざまな意見が出された。

「カラスは、キラキラしたものは好きです」「カラスは、キラキラしたものが嫌い。眩しいから」「カラス避けの方法。キラキラひかるものをぶら下げる。でも、カラスは賢くてすぐ覚えるから場所をちょくちょく変える」「カラスは赤くなったトマトを食べます。カラスはスイカがおいしくなったら食べに来ます。カラスはトウモロコシがおいしそうになってくると来ます」「カラスは逃げる時に羽が引っ掛かるのが嫌なので、糸を張るのがいいと思います」などのさまざまな情報が集まった。保護者の方が手伝ってくれたことで、



自信をもって発表する姿につながったり、自分が調べてきた内容以外の情報を仲間から聞くことで、「みんなで一緒に考えるとパワーになる」と感じたりと、ますます協同して取り組む姿につながっていった。



4) カラス避けを作ろう！

①協同して作ってみよう

カラスの嫌いなもの、として具体的には「鳥みたいに、バサバサするものを嫌がるかも」「目玉を怖がるよね。田んぼで見たことがある！」「CDを吊るすのは？」「鈴の音はどうか」「かかしに守ってもらおう！」「箱で作った人形を置く」などのアイデアが出された。そうして皆で“カラス避けをいくつか作って畑に設置する”と決まった。

6月21日、“鳥”“目玉”“音の出るもの”“かかし(人形)”の4つを作ることにした。友達と意見を出し合いながら、自分達で工夫して活動を進められるよう、保育士は「作りたいもの」毎にグループ分けした。「カラス避けの条件」として、子どもからは「カラスに野菜を食べられないもの」「風や雨で簡単に壊れないもの」という2点が挙げられた。

まず、「どんな形のものをどんな材料で作るのか」をグループで話し合って設計図のようなものを描いてもらうことにした。自分達が作ろうとしているカラス避けのイメージを具体的に考え、共有するために話し合いをするが、言葉だけでは自分のイメージしている形が伝わらないこともある。設計図を書くことによって自分の考えやイメージを、より相手に分かるように伝えられるのではないかと、そして、自分とは違う相手の考えや意見も受け入れながら、互いの意見をすり合わせて1つのものに作り上げて欲しいという保育士の意図があった。



設計図ができあがると、制作にとりかかった。使用する素材は「外に設置するのだから、雨で壊れないもの」という理由でカラーポリ袋・ペットボトル・ガムテープ・マジック・ミラーテープなどが子どもから挙げられた。かかしの手にはゴム手袋が使われた。

子ども達の作った設計図を保育室に掲出したところ、保護者の方も朝夕に目を留め、子ども達の取り組んでいる活動に興味を示してくださっていたが、このゴム手袋は、かかし作りを知った保護者の方が「うちにゴム手袋があるからそれを使ったら？」と持参してくださったものだ。

園では、普段から保護者に向けて活動の様子を写真で掲示したり、ホワイトボードに書いたり、「〇〇について、おうちの人にも聞いてみてね」など投げかけたりと、園の保育に関心を持っていただけるよう工夫している。それにより、保護者も活動のプロセスに興味・関心を持ってくださり、子ども達の「なんだろう?」「やってみたい!」などの想いを実現させるためのサポートしてくださる文化が生まれつつある。



制作には全部で3～4日間ほどかかった。うまく設計図通りに順調に進むグループもあれば、作る過程で意見の違いなどから制作が中断してしまうグループもあった。しかし、スイカや野菜を守る為には時間が無いことも良く分かっており、保育士の励ましも受け、なんとか自分達で折り合いをつけながら、知恵と力を合わせて一生懸命に“カラス避け”を作りあげていった。



②畑に設置！

6月末、やっとできあがった“カラス避け”を菜園に設置する段階になったが、かかしをどうやって立てるかが問題になった。子どもからは「先生、太いパイプってある?」「無いなら、カラーコーンにするか」「木の棒で看板みたいに立てたらどう?」などの意見が出された。話し合いの結果、「角材にガムテープでかかしを固定し立てる」ことになった。しかし、かかしをしっかりと固定して畑に立てるのは難しい。担任と子ども達は「そうだ、高村さんをお願いしてみよう」と考えた。「高村さん」とは男性の保育補助職員で、施設の安全管理・点検を一手に引き受けてくれている。子ども達も日頃から、「高村さん、金魚のお水换えているの? ありがとう」「高村さん、ここが壊れちゃったけど、直せる?」などコミュニケーションが自然に取れており、何か修理したい時など「困った時には高村さん」という感覚が身に付いている。「かかしを角材に取り付ける」「畑に立てる」

方法を相談し、手伝ってもらった。

そのほかのグループの「カラス避け」も子ども達が設置場所を考えて、設置した。その時もカラスの姿が見られたが、遠巻きに畑を見ているだけで近寄って来なかった。「俺たちがいるから来られないんじゃない?」「カラス避けがあるから来られないんじゃない?」など、子ども達は自信満々。きゅうりやミニトマトを育てている年下のクラスからも「お兄さん、お姉さんが（カラス避けを）作ってくれた」と言われて少し得意気な様子だった。

それから、カラスによる食害は本当に無くなった。カラス避けを作った効果があったのだ。



5) 収穫できた！

7月18日、待ちに待ったスイカの収穫。スイカは全部で10個ほどできた。担任の予想をはるかに上回る数であった。まずは1個だけ収穫してみようということになった。収穫するスイカの候補は2つあった。一番大きめの、直径22～23cmほどのスイカだった。「どちらを採る？」と子どもも担任も迷ったが、ある保育士から「叩いてみて、低い音の方が良いらしいよ」という情報があつた。それで、候補の2個をみんなで叩いて音を確認めた。「こっちの方が、低い音がするよ」と、低い音がした方のスイカを収穫した。「結構、いっぱいできたよね！」「俺が運ぶ！」「重いっ！」など子ども達の表情は嬉しそうだった。

担任が「収穫したスイカをどうするか？」と聞くと、「今日のおやつ（フルーツポンチ）に中身をくり抜いて入れたい」「汁は、コップで飲みたい」との声。保育室に持ち帰って、皆でワクワクしながらスイカを切ってみた。

「わー、本当に赤くなってる！」「種がすごい！いくつ入っているんだろう！」「白い種もある！」と喜ぶ子ども達。その日はフルーツポンチとスイカジュースを楽しんだ。味

についても、正直担任も周囲の保育士も期待はしていなかった。それほど肥料等に手間をかけたわけでもなく、そんなに簡単に甘い、美味しいスイカができるはずはないと予想していた。しかし、収穫したスイカは大人の予想に反しとても甘く、それにも驚いた。

スイカ栽培が初めての試みであったこと、カラスから守り抜いたスイカだったこと、自分達が思っていた以上に甘くておいしかったこと、たった2本のスイカの苗から思いがけずたくさんの実が収穫できたことなど…子どもにとっても担任にとっても、今回の栽培は大きな感動だったのではないだろうか。



6) もしもきょだいなスイカがあったら・・・

7月末、「スイカ畑」を協同画として描いた。つるがグニャグニャとあちこちに伸びている様子、葉の形や実の付き方など、スイカを育ててきた経験から自然と描かれていた。興味深かったのは、カラスも描かれたことだ。しかも、何となくカラスに愛情を感じているような描き方に見えた。もしかしたら、子ども達は「カラス」について調べるうちに、カラスへの親近感を持ったのではないかと考えられる。

その後も少しずつスイカを収穫し、

- ・しばらく飾る。お家の人や他のクラス、先生達に見せたい。
- ・いっぱいあるから、他のクラスにも分けてあげよう。
- ・スイカを食べた後に、種飛ばしをしてみたい。
- ・子ども達に、スイカに関する絵本『すいかのたね　ばばあちゃんのおはなし（さとうわきこ　さく・え　福音館書店）』を読み聞かせたい。

など子どもや保育士が考え、8月中旬頃まで様々な形で活動は継続した。



5歳児クラスでは、担任が「毎日1冊、子ども達に絵本の読み聞かせをして色々な世界を楽しんで欲しい」と考え、時には活動と関連させた内容なども選びながら絵本に親しむ機会を設けている。そんな中、8月24日は担任が絵本『きょだいなきょだいな（作：長谷川摂子　絵：降矢なな　福音館書店）』を読んだ。絵本の中には様々な「巨大な」ものが現れる。子ども達は、絵本の中の詩の内容を面白がり、豊かな発想で「もしも、こんな巨大な〇〇があったら？」などイメージしながら発表し合って楽しんだ。そして次の週に、それを活かして協同画を描いた。「もしも巨大な布団があったら」「もしも巨大な石鹸があったら」そして「もしも巨大なスイカがあったら」という3つを子ども達は題材に決めた。担任が特に「スイカの活動につなげよう」と意識をしていたわけではなかったが、子ども達の中では「育て、見て、触って、味わってきたスイカ」栽培の経験が活動につながり、スイカがとても身近で愛着を感じる存在



になった結果、巨大なスイカという発想に発展したものと思われる。大きくて赤い果肉や、たくさん入っていた種などが印象的だったのか、力強く描いていた。その周りには小さな人間達。「種飛ばしをしている人もいるの」「100人、描こうね（絵本の内容から）」ユニークで、様々な空想が広がる絵ができあがった。

3. 子ども達の創造性を育むために大切なこと

今回の一連の活動内容を振り返り、子ども達の「創造性」を育むことに関係していると思われる要素を拾い上げてみる。

1) 「自分達で考えて、決めていい」という環境の中で生活することは、子ども達の発想をより柔軟にする。

今回の事例は、「育てた経験がないため、うまく育つかどうか分からない」と保育士が不安を感じる中、「スイカを育てて食べたい!」という子ども達の想いに寄り添う形でスタートした。何を育てるかを自分達で決め、苗も選び、植えて・・・と主体的に係わった結果、その後課題が生じた際にも、解決に向けた様々な想いや考えを伝え合い「どうして、こうなったのだろう?」「どうすれば良いかな?」「こうしたらどうかな?」などを皆で考える姿につながったと思われる。保育士が決め、子どもの想いに寄り添わず、与えられた活動であったらどうであろうか? 当園では「必要以上にだめ・いけません」を言わないことを大切にしているが、子ども達が否定されることなく、日々の生活の中で自由に自分の考えを出し合いながら、自分達で決めていく、という環境は子ども達にとっては嬉しい経験であるはずだ。「自分達で考えると楽しい!」「自分達で決められるとワクワクする!」そのように感じられる環境の中でこそ子ども達の発想はより柔軟になり、子ども達の創造性を育むことにつながるのではないだろうか。

2) 友達と一緒に考えたり、友達の違った意見を聞いたり、みんなで一緒に課題を解決しようと協同する経験は、自分の考えを更に膨らませたり、力を合わせて、諦めずに新しいことを考えようとする意欲につながる。

当園では、育てたい子どもの姿の一つとして「まわりとの良い関係をつくり、適応力を育む」を掲げている。3歳児クラスからは少しずつ“皆の前で自分の意見を言う”経験を重ね、担任は子ども達の様々な発言を否定せずに受け止めていく。4歳児クラスになると“皆で話し合う”場面を意図的に設定し、子ども達一人一人が自由に自分の考えを出せることの楽しさを感じられるようにしている。5歳児クラスになると、週1回程度は「○○についての話し合い」のような活動を保育の中で計画し、それ以外にも、トラブルがあった時・何か子ども達から提案があった時などには、担任が臨機応変に「朝の会」や「帰りの会」などで時間を作り、子ども達同士で話し合い、自分達で解決に向けて考える機会を作るようにしている。そのような経験の積み重ねが、今回の事例のように、課題が発生した際に、皆で意見を出し合い、アイデアを出し合いながら、自分自身も主体的に関わり、諦めずによりよい解決策を考え続けようとする意欲につながるものと考えられる。そのような意欲が創造性を育むためには必要ではないかと考える。

3) 園庭、園周辺、地域などの環境は、子ども達の想いを実現させたり、新しいことに挑戦したり、発展させるための大きなきっかけとなる。

前述したとおり、当園は自然豊かな環境に恵まれている。日々、散歩中に目にする里山風景は、市街地とは思えない素晴らしい景色である。子ども達は農作業をしている方々と出会い、挨拶を交わす中で顔見知りになり、「ムカゴ」を頂いたり、咲いている花の名前を教えて頂いたりしている。またJA直売所や近隣農家の方々、ボランティアの方々などの温かい眼差しにも見守られている。10年以上の蓄積で園庭奥の菜園での栽培活動も充実してきた。そのような環境の中で、「育てたい野菜」の名前が自然にいろいろと挙がってくるように、子ども達の発想も広がっていったものと思われる。今回の事例の中で子ども達が食害対策について考える際も、近隣農家の方から情報をいただくなど、地域からの情報を参考にしながら、子ども達が自分達なりに対策を考え出すことに発展していった。

4) 保護者の保育活動に関する理解が、子ども達の活動を支え、子ども達が考え続けるためのエネルギーとなる。

今回の「カラス避け」作りは、保護者からの情報提供等も支えになった。クラスのお知らせボードや子どもから聞いた話を基に、保護者も「カラスの嫌いなもの・好きなもの」「カラス避けの作り方」などを子どもと一緒に調べてくださったり、知識を提供して下さったりした。また、かかし作りに必要なゴム手袋を家から持参してくださるなどの協力もあった。保護者の応援を感じながら活動を進めることで、子どもも保育士も「お家の人と一緒に取り組んでいる」と感じ、より楽しんで活動に取り組めたのではないだろうか。日頃から園の活動に関心を持ってくださる保護者の存在は、子ども達の活動を支え、子ども達がより深く考え続けるためのエネルギーとなっている。

5) 子ども達の「創造性」を育むには、子どもの自由なひらめきを受け止め、必要に応じて支援を行い、子ども達の活動を支える保育士の感性が重要

保育士の「一人一人の子どもの何気ない一言や内面を読み取る力」も大切だ。それにより、子どもの興味や関心に合わせた主体的な活動が生まれる。小さい時からそのような保育環境の中で生活することで、子どもは安心して伸び伸びと自分の感じたことや考えたことを表現できる。事例の中の「カラスからスイカや野菜を守りたい!」という子どもの想いに対して、保育士はどのように支援を行うか……。その時その時の子ども達の心の動きを的確に捉え、子どもの自由なひらめきを受け止める柔軟な感性が、保育士にこそ求められる。

4. 子ども達の創造性を育む保育実践のために

・規制されず、自分を表現できる環境を大切に

当園が日頃から目指している“子どもの人権の尊重”を意識し、保育士が「ダメ、いけませんをなるべく使わない」保育は、0歳児からの情緒の安定と保育士との信頼感、園生活への安心感を保障し、子どもが自ら様々なことに興味を持ち、取り組んだり挑戦したり、自由に表現しようとする環境を子ども達に提供することにつながると考える。

また、保育士同士が自由に「対話」ができる環境も大切と考えている。職員会議や職員研修の場でも、一方的に話を聞くだけでなく、なるべく「対話」の時間を設けるように心がけている。また、それだけではなく、例えば、保護者用に廊下に掲示されている各クラスの実践を見ながら、「〇〇組の掲示、面白いですね!」「こんなことをやってみたのですね!」「これ、真似していいですか?」などと、クラスを越えた保育士同士の何気ない会話がある。その中から新しいアイデアや、保育士自身の「やってみたい!」という挑戦的意欲が育まれる。これからも保育士同士がお互いに語り合い、「いいな」と思ったことをお互いに学びあえる職場の雰囲気大切に、保育士の感性を育て、子ども達の柔軟な発想を受け止める環境につなげていきたい。

・保護者といっしょに

当園では、日頃から「保護者と一緒に子育てを」という意識を強く持ち、取り組んでいる。例えば個別面談では、保護者にまず「どんな子どもに育てたいか」を語って頂く。また園とご家庭とで「子どもの良い所」を共に喜び、「伸びようとしている所を更に伸ばす為には?」など具体的に話し合い、関わり方を共有している。

保護者には、園の保育内容を理解していただき、信頼していただく為に、掲示や園便り、懇談会、個別面談等、様々な機会に発信している。それによって、保護者が園での子ども達の様々な活動に興味・関心を寄せていただくことにつながっていると考えている。

最近では、園から家庭に持ち帰った野菜類を「こんな風に調理して食べました」「ピーマンが食べられるようになりました」「〇〇ちゃんのおばあちゃま直伝の調理方法をご紹介します!」など、家庭で撮影した調理風景や料理の写真、子どもが食べている写真、レシピ紹介などを提供して下さるご家庭が増えてきた。また、画用紙に写真とメッセージを入れた掲示物を作成して持参される保護者も増えて



きた。就労でお忙しい保護者の方々だが、子ども達や園の活動に理解を示し「いっしょに
いっぽ」の心で支えてくださっている。子ども達の挑戦的意欲や表現活動を応援し、支え
ていただく環境として、保護者との連携を大切にしていきたい。

・地域の特性を活かして

園周辺の自然環境には本当に恵まれている。近隣の農家の方々など、園に対して好意的
にお力を貸してくださる方にも恵まれている。今回の事例を振り返っても、子ども達が自
分達だけでは解決できないこと、保育士の力だけでは発展しえなかったこともあったが、
地域の様々な恩恵を受けながら、子ども達は自分達の想いを形にできたと感じる。それぞ
れ地域の特性は異なるが、地域とのつながりを大切にし、関係性を築いていく中で、それ
を活かした体験へと発展していくように思う。

5. まとめ

今回、「スイカ栽培からカラス避け作りへ」という一連の事例からテーマについて掘り下
げる作業を行った。「ワクワク、ドキドキ」「ガッカリ」「どうして?」「どうする?」
「こうしてみる?」「こんな方法もあるよ」「やった、嬉しい!」「おいしい!」など様
々な想いを経験した子ども達。大きくて美味しいスイカの収穫を目指して皆で主体的に取り
組んだことは、創造性を育む経験につながったと考える。

子ども達の「創造性」を育むためには、保育の内容はもちろん、保護者との関係作り、
地域とのつながりが大事であることを今回改めて感じる事ができた。園全体で日々意識
し、努力することで培われるものである。その基礎となるものを大切にしながら日々の保
育実践を更に豊かなものにしていかれればと思う。子どもが思ったことや考えたことを自
由に表現できるような安心できる保育の環境を保障し、今までの経験を活かして自分達で
考え、仲間と調整し、協同し、地域や家庭の応援も受けながら、ものやことを創り出して
いく。子どもがそのような経験をたくさんし、「これからの時代に求められる資質・能力」
を育んでいけるよう、これからも保育の環境をより良いものにする努力を続けていきたい。

